

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 22 日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24700666

研究課題名(和文) 競技者を対象としたスポーツチームに対する結果予期の実態と関連要因の明確化

研究課題名(英文) Current status and correlation factor of outcome expectancy for collective psychological performance among athletes

研究代表者

荒井 弘和 (ARAI, Hirokazu)

法政大学・文学部・准教授

研究者番号：30419460

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期(以下、集団の結果予期)」に着目した。まず、主成分分析を用いて、集団の結果予期の評価尺度を開発した。つづいて、集団の結果予期の関連要因を検討した。対象者は、わが国の大学生競技者であった。集団の結果予期の評価尺度は、内的妥当性と内的整合性を保持していることが確認された。集団の結果予期は、「性別」や「個人競技・団体競技」等の要因で異なっていた。また、集団の結果予期は、「部全体の人数」や「総練習時間」と関連していた。集団の結果予期が、スポーツチームの心理的状况を評価する有効な指標であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：These studies focused on outcome expectancy (OE) for collective psychological performance. First, we used principal component analysis to develop an OE scale to rate psychological performance. Next, we explore the relationships between OE for psychological performance and demographic variables. The participants were Japanese college athletes from the first to third years from 2-year or 4-year colleges. The scale's content validity and internal consistency were verified. OE score differed with respect to gender, level regularly played at, and whether the player participated in individual or team sports. However, OE score did not differ with respect to grade. OE score was related to group size (total number of team members) and total number of workout session hours. It was indicated OE for collective psychological performance is useful for assessing a sport team's psychological condition.

研究分野：複合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：チームビルディング スポーツ集団

1. 研究開始当初の背景

(1) データ・理論に基づくチームビルディングの必要性

スポーツチームの競技力向上においては、メンバー個人の心・技・体の強化だけでなく、チームという集団の強化（チームビルディング）が重要である。しかし、現在のところ、多くのチームビルディングは、データ・理論に基づいて行われているとは言えない。

(2) チーム力の指標としての「心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシー」

荒井 (2011) は、チーム力を構成する重要な要素の 1 つとして、「チームの心理的パフォーマンス（競技中の心理的な状態のこと）」を提案している。それを予測・向上することを意図して、チームの心理的パフォーマンスが発揮できるという感覚（私たちのチームは、～することができる）である「コレクティブ・エフィカシー (Bandura, 1982)」の評価尺度を作成して、チーム力の評価に用いている。

(3) コレクティブ・エフィカシーを用いた心理的パフォーマンスの評価

コレクティブ・エフィカシーは、心理学で有力な行動理論である社会的認知理論 (Bandura, 1977) を集団に適用した考え方である。つまり、コレクティブ・エフィカシーに焦点を当てることで、社会的認知理論のチームビルディングへの適用可能性が検討され始めている。

(4) 見逃されてきた重要な変数「集団の結果予期」

しかし、社会的認知理論の主要な変数の中で、集団への適用が検討されていない変数がある。それは、集団の結果予期である。結果予期とは「自分自身の行動の帰結として得られるものに対する予期 (Bandura, 1978)」である。そもそも、社会的認知理論の研究において、結果予期の研究は少ない (Williams et al., 2005)。まして、集団の結果予期に関する研究は皆無である。そこで、データ・理論に基づくチームビルディングを実践するために、集団の結果予期に焦点を当てた研究の実施が求められている。

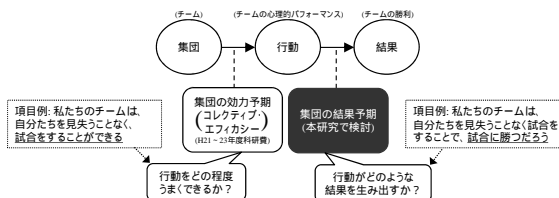


Figure 1 集団における効力予期と結果予期の関係 (Bandura, 1977 を参考に作成)

2. 研究の目的

本研究では、スポーツチームに所属する競技者を対象として、心理的パフォーマンスに対する集団の結果予期の実態と、集団の結果

予期の関連要因を明らかにする。

そこで本研究では、心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシー (荒井, 2011) に対応する「集団の結果予期」として、「集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期」を設定し、その評価尺度を作成することを目的とする (研究 I)。つづいて、「集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期尺度」を用いて、集団の結果予期がどのような要因と関連するのかを横断的・縦断的に検討する (研究 II)。

3. 研究の方法

研究 I

(1) 対象者

本研究の対象者は、大学または短期大学 1 3 年次生で、運動部 (いわゆるサークルは除く) に所属しているスポーツ競技者とした。社会調査会社の登録モニターを対象として、2012 年 12 月 22 - 25 日にインターネット調査を実施した。本研究では、1) 大学または短期大学に所属している、2) 大学または短期大学で運動部に所属している競技者 (マネージャーやスタッフを除く)、3) 学年が 5 年次生以上の者と 26 歳以上の者は除外という抽出条件を設定し、モニターの個人用ページに調査の案内を掲載した。

(2) 測定指標

人口統計学的データ

性別、年齢、居住している都道府県、学年などを測定した。

集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期

「心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシー尺度 (荒井, 2011)」の項目に対応する形で、集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期を評価する項目を 10 項目用意した (Table 1)。「試合中のあなたのチーム全体について、右欄の数字からあなたの考えに最も当てはまる数字 1 つに印をつけてください」とした。回答においては、0 から 100 までの数字を 11 段階で選ばせる形式を採用した。回答欄には、「完全にできないと思う: 0」「どちらともいえない: 50」「完全にできると思う: 100」という表記を付記した。

Table 1 集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期の項目

項目
1 最後まであきらめずにがんばることで、試合に勝てると思う
2 闘争心 (闘志) を持って試合をすることで、試合に勝てると思う
3 自分たちの目標を達成するという気持ちを持って試合をすることで、試合に勝てると思う
4 勝つという意欲を持って試合をすることで、試合に勝てると思う
5 自分たちを見失うことなく試合をすることで、試合に勝てると思う
6 緊張しすぎることなく試合をすることで、試合に勝てると思う
7 集中力を持って試合をすることで、試合に勝てると思う
8 自信を持って試合をすることで、試合に勝てると思う
9 作戦や状況判断をうまく行うことで、試合に勝てると思う
10 試合中や試合の合間に、仲間と励ましあったり協力することで、試合に勝てると思う

(3) 手続き

本研究では、集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期の実態を明らかにするために、幅広いサンプルからデータを集めるこ

とを目的として、社会調査会社（株式会社マクロミル、2012年12月現在で約112万人）に調査を委託した。

インターネットのホームページ上で、研究の概要、研究参加の任意性、研究参加に伴う負担の可能性と回答を中止する機会の保障、研究成果の公表と研究によって期待される恩恵、個人情報取り扱い（プライバシーの厳守）などを説明した上で、同意が得られた（同意欄にチェックを入れた）場合のみ、調査への参加を依頼した。抽出条件を設定した上で、モニターに電子メールで依頼をするとともに、モニターの個人用ページに調査の案内を掲載した。

研究Ⅰは、法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会の承認を得て実施された。登録モニターは、「調査内容についての守秘義務を遵守すること」「調査への参加は、自由意志によるものであること」「著作権は株式会社マクロミルに譲渡すること」「アンケートの結果は、特定の個人が識別できない統計情報としてクライアントに納品されること」という4項目に同意している。

インターネットによる調査に回答した場合、社会調査会社のポイント（平均して90ポイント、1ポイント1円換算）が贈呈された。回答者が約300名に達した時点で、調査を終了した。

#### 研究Ⅱ

##### (1) 調査対象と調査時期

研究Ⅱの対象者は、研究Ⅰと同様である。

##### (2) 測定指標

研究Ⅰで記述した「人口統計学的データ」および「集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期」に加えて、「心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシー尺度（荒井，2011）」を用いた。この尺度は1因子（成分）構造であり、妥当性（内容的妥当性）と信頼性（安定性と内的整合性）が確認されている（荒井，2011）。

##### (3) 手続き

1回目の調査は、研究Ⅰと同時に実施され、2回目の調査は約2ヵ月後に実施された。具体的に記述すると、1回目の調査は、2012年12月22日～25日に行われ、2回目の調査は、2013年2月22日～27日に行われた（2回目は期間を延ばしている）。研究Ⅱも、法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会の承認を得て実施された。

#### 4. 研究成果

##### 研究Ⅰ

##### (1) 対象者の人口統計学的データ

本研究の対象者は309名であり、平均年齢は、 $20.04 \pm 1.20$ 歳であった。性別の内訳は、男子155名・女子154名であり、学年の内訳は、1年生112名、2年生98名、3年生99名であった。居住地の内訳は、北海道28名、東北地方27名、関東地方97名、中部地方44名、近畿地方50名、中国地方24名、四国地

方8名、九州地方31名であった。

##### (2) 集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期の得点

集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期の各項目の得点は、78～83点の範囲に収まっており、標準偏差は、21～24点の範囲に収まっていた。

##### (3) 集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期の主成分分析

集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期の各項目の得点（素点）を用いて、主成分分析を行った結果、集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期は1因子（成分）構造（寄与率75.38）であると判断された。

係数は、.96であった。

本研究の結果から、大学生競技者における、集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期の評価尺度が作成された。

##### 研究Ⅱ

##### (1) 対象者の人口統計学的データ

研究Ⅰと同様である。なお、2回の調査ともに回答した者は176名、最高学年の学生の引退・新入生の入部がなかったのは88名であった。

##### (2) 集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期と人口統計学的データとの関連

性別、個人種目・団体種目、チーム内での地位（非レギュラーと準レギュラー）によって、集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期の合計得点が異なっていた。一方で、学年の間では、集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期の合計得点が異ならなかった。

また、集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期の合計得点は、部全体の人数および総練習時間と関連していた。一方で、集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期の合計得点は、競技経験年数、ミーティングの実施回数、およびミーティングの実施時間と関連していなかった。

##### (3) 集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期または心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシーと、想定された要因との関連

続いて、差が認められたセグメントごとに分析を行った。具体的には、性と個人種目・団体種目ごとに対象者を分けて、それぞれのセグメントで相関分析を行った。集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期または心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシーと、いくつかの変数との間で相関が見られた。また、集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期と、心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシーの関連要因は、一致していないことが明らかになった。

##### (4) 集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期と心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシーとの関連

最高学年の学生の引退・新入生の入部がな

かったのは 88 名を対象とした相関分析の結果、1 回目の調査における集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期得点と、2 回目の調査における心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシーとの間に、関連が認められた ( $r=.56$ ,  $p<.001$ )。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 2 件)

荒井弘和、心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシーの関連要因と増強方略、スポーツ産業学研究、査読有、23、2013、165-175

荒井弘和、青柳健隆、日比千里、大学生陸上競技選手を対象とした一体感向上のための短期ワークショップ型ファシリテーションプログラムの効果、スポーツ産業学研究、査読有、23、2013、101-106

### 〔学会発表〕(計 4 件)

Arai, H., Suzuki, F., & Fukamachi, H. "Is only collective efficacy enough? Outcome expectancy for collective psychological performance among Japanese university athletes." Asian-South Pacific Association of Sport Psychology 7th International Congress & 第 41 回日本スポーツ心理学会大会、2014 年 8 月(東京)

荒井弘和「集団の心理的パフォーマンスに対する結果予期の評価尺度の作成」日本スポーツ心理学会 40 回大会研究発表、2013 年 11 月(東京)

荒井弘和「スポーツ基本計画を支えるスポーツ心理学」日本体育学会第 64 回大会キーノートレクチャー1、2013 年 8 月(京都)

荒井弘和「指定討論：心理学は競技力向上にどのように寄与して行くのか(6)」日本心理学会第 76 回大会ワークショップ、2012 年 9 月(神奈川)

### 〔その他〕

#### ホームページ等

荒井弘和のホームページ「荒井弘和の研究業績」

(<http://homepage2.nifty.com/health-sports/sub2.html>)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

荒井 弘和 (ARAI, Hirokazu)

法政大学・文学部・准教授

研究者番号：30419460